



巻 頭 言

面白く論文を読ませる法

武者利光*

閲読用に回ってきた学術論文などは、何回も何回も読もうと努力しない限り、最後まで読み切ることがつらいという場合が多い。とくに、主題が自分の興味から若干ずれている場合にはなおさらである。その結果として、心ならずも机の上に論文を放置したまま何週間も経ってしまうことになる。それに比べると、随筆風に上手に書かれた文章は、主題に強い興味がなくても最後まで読んでしまっ、「ああ面白かったな」という印象が残る。面白い文章は短時間で読めてしかも強い印象が残るから、きわめて読書効率が良い。学術論文も「面白くてむさぼり読んでしまった」というスタイルで書くことはできないだろうか。

朝日新聞の「天声人語」のなかには、短くて面白い文章のお手本がよく見つかる。よく書かれた文章の構成がどうなっているかを批判的な目で調べてみると、だいたいにおいて、言わんとする主題はボールの陰に隠しておいて、そのまわりにゆらゆらと記述が「ゆらい」でおり、最後にずばりと主題に切り込んでいる。記述が「ゆらいで」いる間に、最後の主張がもっともであるという心理的な地盤を読者の頭の中に作りあげているようである。ゆらぎは別の見方からすれば「遊び」である。初めからストレートに主題を繰り返し述べる文章は、読ませる文章としては落第であろう。

最近、近所の本屋から「サザエさん」の第1巻から68巻までが蜜柑箱に入れられてどさっと配達されてきた。大学2年生の末の娘が私へのつけで注文したものである。幼い頃断片的に読んで、いろいろと物の考え方に影響を与えた「サザエさん」を今になって全部読み直したい、というのが彼女の言い分である。せっかく買ったのだからと思って私もぱらぱらと読み始めたところ、その組立てがまた「面白い文章」を書くためのお手本として最高なのである。全部が全部ではないが、起承転結のスタイルにそいながら、一コマごとに適当に意外性をもたせて最後の「どんでんがえし」にもっていく。学術論文のなかで「どんでんがえし」をするのは困難かもしれないが、新しいスタイルの面白い学術論文があってもよいではないか。ただし、閲読者が「遊び」を理解することが先決ではあるが。